



ドキュメンタリー

「自然を知る新たな知を求めて」

～映像で語る生命誌研究館の20年～



私たちはどこから来たのか？ 何ものなのか？ どこへゆくのか？…

チョウ、ハチ、クモ、カエルなど身近な生きものから生命現象の本質を探り、その表現を通して新たな「知」の構築を試みる生命誌研究館の日常をつづるドキュメンタリー映画です。伝えたいテーマは、「自然を知り、その中で生きているという感覚を持つことの大切さ」です。ぜひご覧頂き、生命誌のこれからを一緒に考えて下さい。

本編約36分 カラー 2014年 16:9 ステレオ

※教育機関や公共の場での上映会用にディスクの貸し出しも行っていきます。

※このDVDは、以下の書籍に収めています。
生命誌年刊号『ひらく』(新曜社) 本体2,300円+税



JT 生命誌研究館

〒569-1125 大阪府高槻市紫町1-1 <http://www.brh.co.jp>

20年をふり振り返りながらの生命誌研究館の日常です。大阪府高槻市にある4階建て、面積3,697平方メートルという小ぢんまりした建物で常時40人ほどが活動しています。入口正面は二重らせんをイメージした「生命誌の階段」、1階が地球誕生、2階が生命誕生と登っていき、4階の現在へと続きます。38億年の進化を普遍性と多様性の両面から示すイラストがあり、1段ほぼ1億年、生きものの歴史を実感する場です。

まず、生命誌絵巻を見て、来館者に考えを共有していただきます。「愛づる」気持ちを大切に研究を進め、表現していることも知っていただきたいと「蟲愛づる姫君」の物語りに研究の様子を入れた屏風があります。「生命誌の階段」を昇り降りしながら館内を自由に歩くことで生命誌を感じる、研究館はそのような場です。

活動の基本は、チョウ、ハチ、クモ、イモリなど小さな生きものを通して“生きているとはどういうことか”を問う研究です。毎日の生活をていねいに撮りました。クモが脊椎動物・節足動物に共有の左右対称性が生じる機構を示し、イモリやカエルが初期発生共通のしくみを見せます。イチジクとイチジクコバチ、チョウと食草の関係から昆虫と植物が作る多様な生態の面白さが見えます。小さなグループですが、本質を見る独自の研究を進めています。実験室ツアー、レクチャー、サマースクールなどで研究への参加の機会もあります。

「生命誌」の表現も大きな挑戦です。2階ギャラリーには大絵巻「生きもの上陸大作戦」、1階はゲノム、細胞を基本にした生命現象を展示しています。季刊誌の発行も重要です。最新の挑戦は生命誌マンダラの作成、これで「階層性」に注目する新しい表現への一歩が始まりました。研究館を特徴づける表現活動です。小さな集団ですが、確たる理念の下、着実に歩んでいる私たちの日常を知り、これからを楽しみにしていただきたいと思います。



〈概要〉

一年を通じ、館内の日常である実験研究と顕微鏡等で観る小さな生きものや細胞の世界を、個別の知見を総合する表現の現場と人々が訪れる展示・催しの場面をドキュメンタリーとして記録し、誰もが思う「私たちはどこから来たのか？ 何ものなのか？ どこへゆくのか？」という問いと共に、生命38億年の歴史を辿り、多細胞化、上陸、共進化などのエポックを考えます。さらに自然に眼を向けるフィールドでの採集や、館長中村桂子と関野吉晴氏との対談、生命誌に共感し農業科を設けた喜多方市小学校の授業にもカメラを向け、自然の中で、社会の中で、生命誌を考える作品としました。

[キャスト]

出演：JT生命誌研究館メンバー 協力：喜多方市立熱塩小学校、グレートジャーニー連絡事務所、関野吉晴、高槻市立芥川小学校、筑波大学菅平高原実験センター、徳島県立城東高等学校、広島大学両生類研究施設、BRH ご来館の皆様、ほか。

[スタッフ]

総指揮：中村桂子、企画・構成：村田英克、語り：齊藤わか、撮影：中井正義、長谷川諭、VE：藤平喜弘、AD：渡邊将好、編集：榎樹讓、音楽：北條玄隆、プロデューサー：牧弘子、監督：藤原道夫

制作：メディア・ワン

製作・著作：JT生命誌研究館

●お問い合わせ：072-681-9796